

酒呑童子山地域の水生動物

酒呑童子山系の峰々を結ぶ中津江村と上津江村の村境を、ほぼ分水嶺として北は鯛生川、南は川原川に幾筋もの支流が流れ込んでいます。これらの河川で、主として水生昆虫と魚類を採集して、その生息状況を調べました。

底生動物



笹野川フィッシングパーク上流



同左で採集した動物

この地域から84種の底生動物を採集できました。大半は水生昆虫（76種）です。多いほうからトビケラ類21種、カゲロウ類18種、カワゲラ類17種、トンボ類8種、双翅類7種、鞘翅類3種、半翅類・広翅類各1種、その他7種となっています。ほとんどが「きれいな水」に生息する種類ばかりでした。

カワゲラ類の種数や個体数が多い

下の帯グラフの「標準構成」は、一般的なきれいな河川の上流域に多い水生昆虫4種類の種数パーセンテージの1例です。このグラフと比較すると酒呑童子山地域はカワゲラ類の多いことに気がつきます。カワゲラ類は代表的な「きれいな水の指標種」で、さらに、流水性、溶存酸素の多い冷水性種です。フィッシングパーク上流に最も多くすんでいました。

トビケラ類、トンボ類が比較的少ない

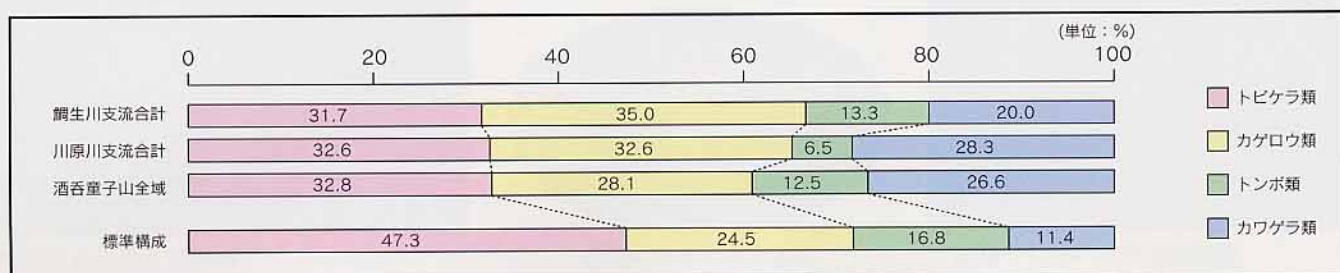
トビケラの仲間は、石の間や岩の表面に網をはったり、砂や植物のかけらなどを綴り合わせた巣を持ち歩くものが多いので、川床が安定していないと住みにくい種類です。この地域の川は、河道傾斜が急で、水量や流速の増減がかなりなものとされます。渾や淀みの砂泥底を好むトンボの仲間にもすみにくい環境です。

ムカシトンボが生息するような溪流がある

鯛生川支流の御所谷と、川原川支流の保慶川でムカシトンボの幼虫を採集しました。「生きている化石」といわれるムカシトンボは、優れた森林内の溪流の早瀬に生息します。酒呑童子山地域は、全山が針葉樹の人工林に覆いつくされているという印象ですが、川の流れている谷部には優れた天然林が残っています。



ムカシトンボの幼虫



採集した水生昆虫4種類の種数構成



平川、平橋上流



トノボ類

同左で採集した動物

ブチサンショウウオやトノサマガエルが確認された

平川の平橋上流で、堆積岩の入り江状岸辺にセキショウの根っこや葉が垂れている部分で、たも網でブチサンショウウオの幼生が採れました。標高600m地点でした。ブチサンショウウオは、大分県下では標高500m以上の山地溪流付近に生息していますが、みつけるのはたやすくありません。



ブチサンショウウオの幼生（変態中）



トノサマガエルの成体

また、近くの川原で跳びはねていたトノサマガエル1匹を捕獲しました。トノサマガエルは、かつては大分県下でも田植えが始まるころになると、どこの水田でも繁殖のための大合唱が聞かれたものです。このカエルは特に農薬に弱いようで、ほとんど姿を消していますが、山里の小池や、付近の川原でみかけることがあります。

魚 類



ムギツク



イトモロコ



カマツカ



ヤマメ

清流域の指標種ヤマメの生息が確認された

ヤマメは、鯛生川の鯛生地区や支流の平川、中川内川などの標高500mより高い地域に生息しています。清流域の指標種です。

タカハヤがほとんど全域に生息しており、ウグイも鯛生川、川原川の上流域を除くほとんど全域に生息しています。

カワムツが下流の淵を中心に生息しており、下笠ダム湖の最上部に近接する部分ではオイカワと重なった分布がみられます。オイカワは平野部（下流域）に生息するのが普通ですが、ここでは両方とも高密度に生息しています。オイカワ生息域には、ほかにヨシノボリ、ムギツク、イトモロコ、ヌマチチブ、カマツカなどがみられました。

◎スケールは10mm